

平成19年用のお年玉付き年賀はがきの販売枚数は36億2000万枚で、3年連続で減少したと日本郵政公社が発表した。携帯電話の普及とともにインターネットのメールで新年のあいさつを済ませる若者が増えたことが原因とする説が根強いが、同時に「これまで年賀状を出していたが、やめた」という人も目立つという。脱・年賀状、その理由は―。(津川綾子)

メールで思う存分

「大変な箱ながら、メールでの年賀のあいさつに代えさせていたんです」。京都精華大学の筒井洋一教授(国際関係論)は数年悩んだ末、これまで手書きでしたためてきた年賀状200通のうち90通を今年からやめ、そんな一文を書いたメールを送った。

「はがきだとスペースが限られていて、ありがたりの表現にまとめるしかない。メールなら文字数に限りがないので、一人一人にメッセージを存分に書き込め、気持ちを伝えることができて」と考えたからだ。

送信したメールには今年の抱負や、送る人それぞれへのメッセージをつけた。その結果、年賀はがきの何倍もの文字を書き込むことができた。10人ほどはその後メールの交換が続き、「よく思い切った」「私にはよくできてきたが」「などの賛同や驚きの反応のほか、年に一度会うかどうかの研究仲間とは

「今度一緒に研究プロジェクトを立ち上げよう」という話も持ち上がった。

前は出していたけれど…

「脱・年賀状」派、増えています

「新しい交流に近づいたのはメールに変わったおかげ」と筒井教授。「新年のあいさつは、言葉に自分の気持ちを乗せることが何より大切。来年はもっとメールにシフトしようと思っている」と語った。

時間かけ丁寧

受け取った年賀状の束をながめながら、東京在住のワインコ

「ディネーターの友田昌子さんは毎年、ため息をつく。「ありきたりの干支の柄が印刷してあって、あて名もシールをはるだけ。こんな年賀状はもううらまへない」

友田さんも過去一度、手書きのメッセージも添えない味気ない印刷年賀状を出したことがあ

ったが、「失礼だったな」と反省する。酒類を扱う仕事柄、年末は多忙を極める。散々迷ったが「忙しいからと安易な年賀状を用意して出すのは、心がこもらず失礼にあたる」と思い、10年前から年賀状を出すことをやめた。

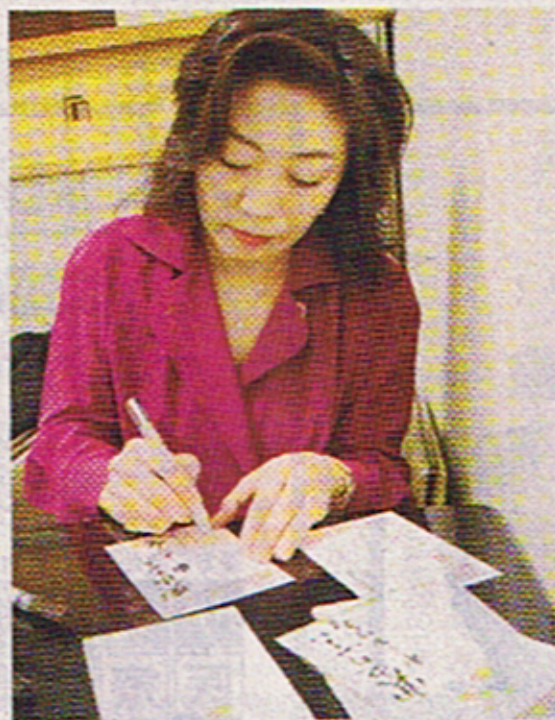
月中旬、毛筆ペンと季節の柄のはがきを使って年中見舞いをするため。1年に一度のあいさつだからと、相手と自分のつながりがちゃんと確かめられるように、時間のあるときに「願を思い浮かべて書いています」

進みゆく簡略化

脱・年賀状。を果たした理由はそのほか、年に一度のあいさつをもうひと気持ちのこもったものに、との思いでは共通する。

通信総合博物館の切手・はがき担当部長、武田文さんは「近年も年賀状がますます減った。がっかりだという声は多い」と明かす。そもそも年賀状の風習は年始回りを簡略化したもの。経済発展とともに人々の交流が広がったことが定着した背景にあるとみられる。

最近、年賀状の内容が味気なくなってきたことについて武田さんは、「人々の交流範囲がさらに広がり、送り先が増えたことから、形式だけでなく『昨年一年ありがとう』という気持ちまで簡略化されてしまった寂しさもある」と指摘している。



年中見舞いを手書きする友田さん。ツバキ、梅…はがきの柄やあいさつ文も一人ずつ変化をつける―東京都内

お年玉付き年賀はがきは昭和24年から売り出され、その後、経済発展に歩調を合わせるように販売枚数は基本的に伸び続けた。平成10年にはおよそ41億9500万枚に達している。しかし、同年をピークにして11年以降は、パソコンや携帯電話の普及率が上昇するとともに、販売枚数はおおむね減少傾向を示し、メールで年始のあいさつをする動きが広がっている。

パソコン、携帯の普及とともに減少

ちなみに、アサヒビールお客様生活文化研究所(東京)が昨年末、20代以上の男女1677人に実施した調査によると、「年賀状を出さない」人は全体の11.2%で、年齢層別では、20代24.9%▷30代12.1%▷40代9.1%▷50代7.8%▷60代以上2.9%―という結果だった。一方、年賀メールは、20代の61.2%が「送る」と回答している。